

炎症性腸疾患:クローン病の病態と治療の新たな展開

司会 福岡大学筑紫病院消化器科 松井 敏幸
兵庫医科大学下部消化管科 松本 誉之

クローン病(CD)の病態に関しては、疾患感受性遺伝子、薬物代謝遺伝子多型、自然免疫、腸内細菌層の関与、など新たな展開が著しい。その結果の多くは治療への応用が期待されている。一方、CD診療ガイドラインが設けられ、一般的な診療が容易になった。さらに、免疫調整剤、栄養療法、白血球除去療法、生物学的製剤による治療効果が新たに評価されている。特に、infiximab による長期効果、他の治療法との併用、副作用(狭窄、結核、感染症)抑制、手術率の低下、などが重点的に検討されよう。